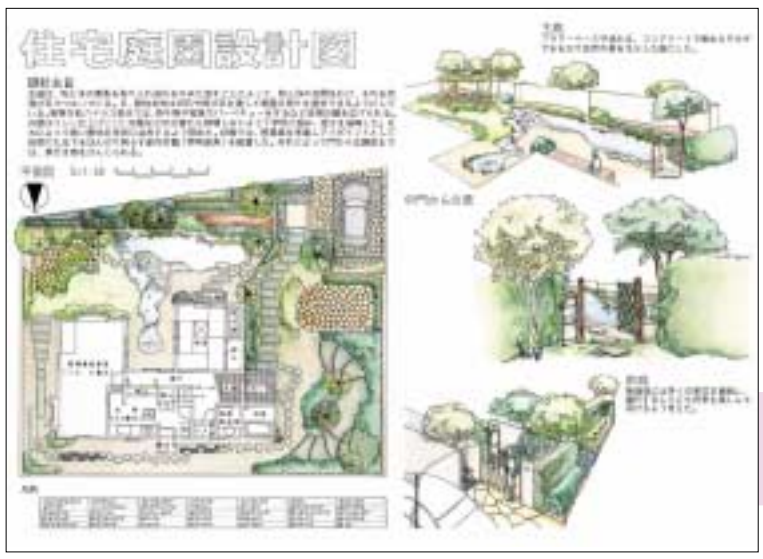

高校生の部　作庭実習部門入選
平野　吏瀬　岐阜県立加茂農林高等学校

和と洋の要素を取り入れ、中央に流れを設け、和と洋の空間を区分し、飛び石でつないだ。敷地全体は、切石や飛び石で遊歩でき、車庫前のテラスでバーベキューをするなど活用の幅を広げられる。外壁はリシン仕上げとし耐震性を高めた。

全国高等学校造園教育研究協議会長賞

高校生の部　住宅庭園部門入選
大岩　真弓　大阪府立園芸高等学校

雑木林から見える山里の民家を表現。敷地の右より庭先に入り、右手を民家に見立てた。園路先に杉皮屋根の腰掛を設置し、民家の入り口をイメージ。軒先は、ウメなどの果樹や縁起物のナンテンを利用。竹垣の端材を再利用し、敷き詰めた。

第28回全国造園デザインコンクール

大学生の部　街区公園部門入選
義田　修子　明治大学

自由に空を飛ぶ鳥のように伸びやかに遊び、時を過ごしてもらいたいというのがこの公園の大きなテーマ。鳥かごという閉鎖的なモチーフを通り抜けると、草原、雑木林、水辺、竹林など、魅力的な風景の4要素を区分、デッキで連結した。

高校生の部　街区公園部門入選
有吉　加陽子　山口県立宇部西高等学校

人間の「わ」がなくなりつつある都会に「わ」を取り戻すために設計。緑あふれる園路や芝生、噴水、遊具などで遊び、人と人との交流に役立つよう出入り口を設けず木々の間から自由に出入りできる。公園も輪を多用したデザインとした。

高校生の部　街区公園部門入選
藤村　直樹　山口県立宇部西高等学校

安全で快適な住みよい街づくりの向上を目指し、公園に防災公園を取り入れた計画・設計を行った。また、平常時の公園としての役割やバリアフリー化、さらに環境学習の場、野外活動の場としての配慮から、樹林帯や池、広場も設置した。

大学生の部　街区公園部門入選　矢野　祥子　南九州大学

地域住民が日常的に公園を通り道として利用する役割を持たせ、閉鎖的な区画を避けた。出入り口はどこでも車椅子利用が可能。芝生の広場は、地域のイベントから一時非難地など、整備形態について、柔軟性のあるデザインを前提とした。

（2面から続く）

についてである。これは何も大げさなことではないし、当り前のことでもあるのだが、とかく、デザインという言葉に振り廻されてしまいがちになる。

課題は、住宅の庭と街区公園であるが故に、それぞれが生活の中そのもの、日々手の届くところにある。家と庭、家と街、人と街、この関係性の大事さをデザイン以前に頭の中に整理、理解して置いて欲しい。造園領域では、こんな理解をしていくことによって、その大きな社会的役割を担うことが出来る。

作庭実習については、今年も健闘の跡が見えた。評価したい。やはり、実体というのは偽りがたい事実であるし、また、体感的に“もの”に触れる、それも手はただ“もの”をつくる道具ではなく、柳宗悦の言う〈手はものづくりでの人間と“もの”との自然な関係〉でのことによるまさしく体得というものであろう。これに達成感というものも加って彼等を喜ばせたに違いない。

今後は、市民、自治体等とのよりよい関係（ワークショップなど）が出来てくればうれしいことだ。

●小板橋二三男委員

昨年に引き続き、作庭実習部門で、「㈳日本造園建設業協会長賞」が授与された。この作品は、高等学校が地域社会へ作庭面で立派に貢献できることを示した好例である。今後このような事例が増えてくるものと思われる。毎回のことながら、作庭実習部門は、具体的に施工されたものだけに説得力があり、審査には難しさと同時に楽しさとがある。

全般的に、個人住宅庭園への応募作品は、街区公園の部に比べてかなりレベルの高い作品が寄せられた。特に、「高等学校造園教育研究協議会長賞」を獲得した作品では、パースに人物が描かれ、説得力のある作品となっていた。今後、人物を描き入れる試みを是非行って欲しいものである。

花テーマの作品に期待

●西山俊雄委員

高等学校造園教育の充実・発展並びに設計及び製図技術の向上と奨励を目的として、昭和49年度発足した造園デザインコンクールも益々充実し28回を迎えた。年々高校生と大学生の力量の差は、然程感じられなくなってきたが、しかし知識の量、経験の浅い高校生には、次のような大変困難な設計作業が要求される。外部空間のディテール・地割とその設計、プレゼンテーション技術、空間スケールの把握等である。これらの事項に多少難点が感じられた。これらの課題解決のためには、普段から参考図書の活用、多くの既在庭園、公園等の見学、造園材料に関する知識等を積極的に研修することが肝要である。そして、設計の際に速やかに素材選択できるようになって欲しい。

作庭実習作品は、応募者数が少ない中、岐阜県立加茂農林高校の全ての作品とも見事であった。互いに協力し、設計から施工まで実施する。プロ顔負けの見事な庭園を完成させており、生徒のやる気と教師の指導力の高さに深く感銘を受けた。

最後に一言、残念なことに応募する学校が毎年一部の学校に片寄ってきている。是非、多くの学校で挑戦、多くの生徒が応募するようになることを切に望みたい。